

私の教職論 (1)

岩 館 晴次郎

My theory on education

Seiziro Iwadate

豊岡短期大学 論集

第 14 号 別 冊

平成 30 年 2 月 28 日 発 行

私の教職論 (1)

My theory on education

岩館 晴次郎
Seiziro Iwadate

はじめに

私は北海道の室蘭市にある本校の拠点校「北斗文化学園子ども未来学科」で8年間、「保育論」本校で2年間「教職論」を担当している。

この論文は拠点校での今までの講義の中から幾つかを選んで私なりの解釈や考え方でテキストに補足、補充を加えた講義の概要である。それを「1講、2講…」の構成で記載した。

1講 保育者を志した動機、理由などのアンケートの実施

目的は教職論の内容や方法、授業への取組み、意欲などの重要な資料にするため毎回開校時に実施している。

表1 主な動機や理由のキーワード

- | | | |
|---------------------------------------|--------------------|-----------|
| ・子どもが好き (14人) | ・幼稚園の先生の影響 (8人) | 職業体験 (4人) |
| ・身内の子どもとの付き合い (3人) | ・他の人からの影響 (3人) | |
| ・近所の子どもとの触れ合い (3人) | ・親の影響 (2人) | |
| ・障害のある子の世話をしたい (2人) | ・子どもの面倒みるのが好き (2人) | |
| ・たくさんの知識を学ぶ・子どもの夢の実現・資格の取得・障害児の指導をしたい | | |
| ・乳幼児の成長を手助けしたい・大人の見本になれるような先生になりたい。 | | |

主な「どんな子どもを育てたいか」のキーワード

- | | | |
|---|---------------------------|---------------|
| ・元気で明るい子 (5人) | ・優しく遅い子 (5人) | ・仲良く楽しい子 (3人) |
| ・思いやりある子 (3人) | ・自分の意思で自ら行動出来る子 (2人) | |
| ・積極性のある子 (2人) | ・「ありがとう・ごめんなさい」が言える子 (2人) | |
| ・笑顔がある子 (2人) | ・他人の気持ちが分かる子 (2人) | |
| ・他の人への配慮が出来る子・誰とでも触れ合う子・自己主張の出来る子 | | |
| ・好奇心が旺盛な子・挨拶が出来る子・集中力のある子・切替えが出来る子・喜怒哀楽が出来る子・何にでも挑戦出来る子・みんなから好かれる子・人の話をよく聞ける子 | | |
| ・他人のことを思いやれる子 | | |

主な「保育者像」のキーワード

- ・個性を尊重し伸ばしてやりたい・自然と触れさせ感情表現の豊かな子どもにしたい
- ・子どもの立場になれる・子どもの良さを見つけてやりたい・親の気持ちが理解出来る
- ・親たちから信頼され、感謝される・夢が持てる子どもを育てる・一人一人を伸ばす
- ・たくさんの愛情をかけたい

考察

- ・保育士への動機や理由の「子どもが好き」は基本的で重要な資質能力である。
- ・育てたい子どもの像を明確に持っている。
- ・子どもの個性を伸ばし、親から信頼される保育者像を持っている。

2 講 テーマを決める

それぞれの講座に特有の目標があるように私の「教職論」の講座でも「保育の目標を達成する資質能力をどのように高めるか」かの目標を掲げている。しかし、このような「めあて」に近い向上目標では成果がなかなか確認できずに単なるスローガンになったり、メルクマール程度に終わってしまうことが多い。このため向上目標を何としても成果の確認できる達成目標にしなければならないと考え、その具現化の手立てとして講座に「物事を多面的に考え、豊かな子どもに育てる保育者になる。」のテーマを決めた。テーマ設定は講座担当者の強い思いや願いであり、受講者へ豊かな子どもを育ててほしいメッセージでもある。

最近、人の物まね、みんなが意識の同調行動が異常に蔓延し、自分の頭で物事を考えない若者が増え、簡単なことでもガイドスケールが無いと処理できない現象が至る所にある。

本校の学生とても例外ではない。科目試験やレポート、小論文作成、授業での発言、グループ討議などを見ても殆どが誰かの論理の焼き直しや文献、資料の丸写しである。ユニークな発想や考え方、視点を移動して多面的に見ることが出来なく、オリジナリティーが極端に低い状態である。

このように自分がない、人真似だけが長けている保育者の保育からは自分で考え、自立的に行動する、個性豊かで創造的な子どもが育つのだろうか。子どもは教師以上には伸びないのではないかの心配が大きい。

ある人は「考えないのでなくて、考えることが出来ないままに大人になった「幼形成熟現象」だと言っている。確かに状況分析は正鵠であるが教育はそれを解決する考え方や具体的な方法、手段を提示し習得させなければ教育にならない。

「考えることが出来なくなった」理由は数多くあるだろうが私は一つの仮説を持っている。それは考えることの大切さや面白さ、内容、方法などを習っていないことである。ただ闇雲に知識習得を強いられ、百科辞書的な細切れの物知り子どもたちを大量に育成してきた教育の歪みの結果なのであり、決して彼らだけを責められないのである。あたかも泳ぎ方を教えないでプールに放り込み「早く上手に泳げ」と言っているようなもので私たち大人の教育的責任でもある。

私は改めて考えることの大切さとその基礎的な方法や考え方の習得が次代を担う子どもたちを育てる保育者の資質能力になると考えてこのテーマを設定した。

3 講 多面的に考えること

このテーマのねらいは「～多面的に考える～」ことにある。キーワードは物事を一つの見方にバイアスをかけて固定するのではなくて発想を柔軟にして複数の視点から物事を考える「視点の移動」である。例えば物事を縦、横、斜めに見たり、上、下、真ん中などの見方をするると一つの物事の違う様相が見えてくる。視点の移動することのイメージづくりのために卑近な2つの例を挙げて説明した。一つはよく引用されるが鳥の目になって高い所から物事を俯瞰する目、トンボになって複眼に見る目、カメレオンのように変化に対応できる3つの目を持つことである。二つは円錐形の例である。円錐形は横から見ると二等辺三角形、上から見ると真ん中に頂点がある円に、下からは真円に見える。このように一つの立体が視点の移動で多面的に見えることでのイメージづくりである。

4 講 考えることの基本（1） 帰納法と演繹法

テーマの「多面的に考える」ことの最も基本的な思考方法の2つを紹介した。一つは帰納法と演繹法である。

こんな話をした。「ドイツのある町が大雨で堤防が切れて洪水になった。川下の町は橋や田畑が流され、道路が寸断されるなど甚大な被害になった。翌日、復旧に向かう2つのグループがあった。

1つのグループはスコップを担いで川下へ、もう一方のグループは道具を担いで川上に向かった。」

日本ではこんな場合はみんな一緒になって川下に行くのでないか という簡単な話であるがこの話の中に物事を解決する2つの基本的な考え方を示唆している。川下への行動は被害の復旧、救済する考え方で事象の結果を解決する応急な対処療法でいうなれば帰納法の発想である。一方、川上に向かった行動は洪水になったそもそもの原因は山に木がないことにありとて植林をして根本から原因排除をする演繹法の発想である。この2つの思考方法はどちらに優位性があるのかでなくて物事を原因と結果の2面性から考えることの重要さを教えている。

さらに分かりやすくするためにいささか矮小化した論理であるがこんな例も挙げて説明した。

火災の発生した場合、最優先の行動は消火である。目の前の事象の処理をする帰納法の思考である。また、鎮火の後にはなぜ火災が起きたのか原因を見つけて再発防止に当たるのが演繹法の思考である。

5 講 考えることの基本(2) 水平思考

2つは水平思考と垂直思考である。デボノ博士が言ってから久しいの時間の経過があるが、今でも多くの場面で思考を広げる有効な手法として利用されている。この講では水平思考だけ取り上げる。

博士はこんな例え話をあげて水平思考を説明している。

「ある人が高利貸しからお金を借りた。約束の期日まで返済出来なかった。困り果てて娘と二人で返済の猶予を何度も願った。それだけ言うのなら待ってやるがそれには条件が一つある。この袋に黒い石と白い石を一つずつ入れる。これを娘に一つ引かせて、白い石を引いたら帳消しにしてやる。黒い石の場合は借金をすぐに返すか、出来ないのなら娘を差し出せ」と言った。ところが娘は高利貸しが袋に2つの黒い石を入れるのをこっそり見てしまった。どちらを引こうが黒い石になるのだから借金の返済は出来ないため娘は高利貸しに嫁がなくてはならない。娘はどうしましたか。」¹⁾

この例を学生に問い掛け、グループ討議をさせたら、最初は常識的な答えであったものが時間のともに次々とアイデアが広がり予想外の発展した。水平思考は横に広がる発展のモデルである。

文字通り横に広がり、たくさんの解決策を生み出すことになり博士のいう水平思考の効果を実感できた。因みに博士の考えは、娘は袋から引いた石をわざと落としてしまったのである。しかし袋に残っている石を確認すれば、娘の引いた石の色が分かるとの理屈である。ここのポイントは石を引くという行為から視点を移動させて石そのものに焦点化したことにある。

水平思考の理解を確かにする手法の一つに「イメージ・マップ」の作成を取り入れた。

この目的は子どもが一人ずつ違う存在なのに保育者が固定した乏しい思考や発想では適切な保育が不可能である。そのため保育者には多面的に子どもをとらえ、考え、豊富な内容のある保育の力量を習得させるための演習である。これは1つの事柄を中心に多面的に思考やアイデアを横軸に広げて事柄の関連を明らかにすることである。円の中心になる事柄は、「子どもの良さ・子どもの素晴らしさ」である。(図1)

ろうか」と思った。現役のころ、3年生の担任の時の「学級だより」の内容である。「みんな毎日どうして学校くるの」「学校で何をしたいの」と聞きました。初めは怪訝そうな顔をして子どもたちだったがやがてたくさんの反応があった。「おかあさんが行け行けというもの」「金魚に餌をあげるの」「友達と手つなぎ鬼をしたいの」「お勉強あるでしょう」「そんなことわからないよ」「楽しい体育があるからさ」「給食おいしいよ」「休み時間に遊べるからよ」「きのう喧嘩して負けたから今日かたきをとるんだあ」「みんな行ってるでしょ」「先生がおもしろいからさ」などの屈託のないものが載っていた。後日の学級だよりに子どものアトランダムな反応をまとめた内容を載せた記憶が蘇ってきた。発言の全ては子どもの欲求であると考えた。大きく分けると「分かりたい欲求」「仲良くなりたい欲求」「丈夫になりたい欲求」の3つである。これを子どもの三大欲求と名付けた。後日、管理職になり教育目標を考える立場になった。学校には必ず「知・徳・体」の目標がある。幼稚園や保育所にも「よく考える子ども（知）、思いやりのある子ども（徳）・「たくましい子ども（体）」の「園目標」がある。さらにある調査では保護者にも「考える子になってほしい（頭）」、「心豊かな子どもになってほしい（心）」、「健康な子に育ててほしい（体）」の欲求や願いが上位を占めていることを知った。このように考えると学校や園にある教育目標は大人の知恵でこんな子どもを育てる」ための大人の教育的な発想でつくりあげたものでなくとものでなく元々子どもが本来的に持っている三大欲求の達成に大人の論理で教育目標に仕立てあげたことが分かるのである。このように教育目標や園目標は子どもの欲求が詰まったものであることからその欲求に100%応えることが保育の最大の任務である。

7 講 成長・発達と保育

幼稚園教育要領、保育所保育指針は子どもの成長段階に対応した保育の内容が示されている。

成長と発達は類似した概念であるがその差異を明確することが幼児教育には必要である。

成長は主として子どもの外面的な変化の容体である身長や体重、骨格など量的な変化や身体各器官の増大であるばかりでなく心的な内面の変化も含めた概念である。誕生から思春期までの各器官の成長は決して一様でなく変化に富んでいる。特に保育の対象である3歳から5歳までの子どもの成長の理解は保育者の重要な資質になる。

ポルトマンは、「人は出産のすぐには牛や馬など他の哺乳類に比べると一人では何も出来ない「生理的早産」の状態で生まれてくる。しかも生まれた後も他の動物と違い一挙に身も心も大人になるわけではなく少しずつ時間をかけ成長していく生き物である。」²⁾と言っている。また、スキヤモンは生まれてから20歳くらいまでの身体の各器官の成長を4

つに分類し、特徴を明確にしている。脳や神経の成長の「神経型」、骨格や筋肉の「一般型」、精巣や卵巣の「生殖型」と扁桃腺、リンパ腺の「リンパ型」である。中でも際だっているのは「神経型」の脳や神経は生後急速に成長し、10歳前後には完成してしまうことである。さらに「生殖型」は14歳くらいの思春期になると「思春期スパート」と呼ばれるくらい著しく生長をする。そして、最終的には頭は2倍、胴体は3倍、胸は4倍、腕は4倍、足に至っては5倍もの大きさになる。

このような成長を考えると保育は3歳、4歳、5歳の幼児期の「神経型」の成長に密接に関わる仕事なのでこの時期の各器官の成長パターンを十分に理解し、質の高い保育をしなければならない。

次に発達とは辞典には「人の一生涯に定位するならば人の誕生から死に至るまでの間の後戻りはできない方向性を持ち、幾つかの節目を持った行動的、人格的な変化の過程である。」³⁾とある。また、発達心理学では「発達は無秩序に進むのではなく「頭部から足部へ」、「中心から末端へ」、「一般から特殊へ」、「発達の連続性」、「発達の個人差」の法則があるとし順序やスピードには遺伝や環境、経験などが深く関わって決して一律で機械的な発達はしない。」⁴⁾とも述べている。

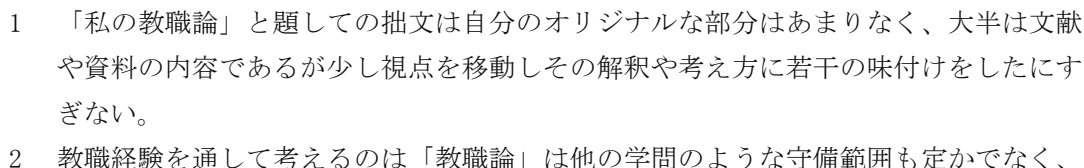
人の生涯を段階に区切った発達の特徴や行動、変化を把握する方法はフロイトを始めピアジェ、エリクソンなど多くある。ここではハビガーストを取り上げた。彼は人の一生を巨視的な視点から時間的な経過を軸に「乳児期」「幼児期」「少年期」「青年期」「成人期」「高齢期」の6つの段階に分けている。特筆すべきことは外形的な特徴や人としての生きるための認知や感情、行動、運動能力などの基本的な能力を確実に身に付け、クリアしなければ次の段階の発達に支障が生ずるとして「発達課題」を提唱していることである。

かつて北海道教育庁の指導主事として生涯学習推進の指導資料の作成に関わったことがある。

人の学びは一生であるとする生涯学習にこのハビガーストの発達課題論の応用を基礎理論にし、生長・発達に対応した学習を強調した「学習課題」を設定し、「生涯学習課題等関連図」⁵⁾を作成した。生涯学習は学校教育が中心になり家庭や地域、社会へと同心円のごとく広がる教育システムになると考えた。

特に幼児期に当たる「乳児期」は親のスキンシップで穏やかな愛情のシャワーを注ぐ「信頼感」が「発達課題」であり、次の保育所、幼稚園の段階になる「幼児期」は自分で考え、行動できる「自立性」が「発達課題」になる。幼児教育ではこの二つの発達課題をクリアさせ、小学校での「少年期」に繋ぐ発達のバトンを落とさずに通過させる大きな責任がある。

「私の教職論」への思いや考え、考察などの要約である。



支える理論体系も希薄である。発達心理学を始め脳科学、人間学、倫理学、哲学など多くの学問の成果を総合的に再構成して成立している応用理論であると考え。それは教育は未熟な大人がより未熟な子どもに働きかける人間関係の営為であるため一つの特定の論理だけでは解明出来ないことがその理由である。

- 3 自分の頭で考えることできないのは考える方法、手段が不足していると考え、考える楽しさや基礎的な内容、方法を意図的に講座に取り入れるために「多面的に考える」ことをテーマに設定した。
- 4 子どもの欲求に応えることは全ての教育の神髄である。特に教育の淵源である幼児教育で幼児の3大欲求に100%応えることが幼児教育の要諦である。
- 5 次代を担う一人一人の子どもの成長と発達に即応した「発達課題」「学習課題」を克服させることが豊かに自ら生きぬく生涯学習の基礎になる。

引用文献

- 1)「本質をつかむ思考法」 伊藤真著 中経文庫 2015年 43頁 デボノ博士の水平思考の引用
- 2)「学校教育心理学」 吉田辰雄著 福村出版 1982年 40頁 ポルトマンの指摘
- 3)「保育用語辞典」 森史朗編 ミネルヴァ書房 2013年 274頁 発達
- 4)「よくわかる発達心理学」 林洋一著 ナツメ社 1947年 20頁 発達には一定の順序と法則がある
- 5)「胆振教育推進資料」 北海道教育庁胆振教育局編 1989年 13～14頁 生涯学習課題等関連図

参考文献

- 1)「教師論」佐藤徹著 東海大学出版会 1945年
- 2)「児童心理学図説」山本多喜司編 北大路書房 1983年
- 3)「人間であること」時実利彦著 岩波文庫 1998年
- 4)「幼児教育と脳」澤口俊之著 文藝春秋 2000年
- 5)「心理学のすべてがわかる本」大井晴策監修 ナツメ社 2014年
- 6)「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」内閣府等 フレーベル館 2015年
- 7)「教育心理学セミナー」 関忠文編 福村出版 1994年
- 8)「教職論」和田幸司編著 近畿大学豊岡短期大学 2016年

- 9) 「保育者論」 汐見掄幸著 ミネルヴァ書房 2017年